



2024年5・6月号

号外
2024
5

発行：NPO 法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX：06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
✉uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

「上町台地」名所図会

第19回

阿倍王子神社
阿倍晴明神社
阿倍野区

安倍晴明の影響もあるのでしょう、安倍氏といえは陰陽師の印象が強いようです。しかし、陰陽道の家として知られるようになったのは平安中期以降。飛鳥期は蘇我氏などにつぐ有力豪族で、平安前期までしばしば高位高官を輩出しました。その安倍氏が治めた場所が、いまの阿倍野区あたりです。ちなみに、安倍氏はもともと「阿倍」と表記しており、区の名前もそれに由来していると考えられます。

阿倍王子神社（写真右）は、安倍氏の氏寺があった場所に建ちます。安倍氏の衰退に伴い氏寺は四天王寺に併合され、氏神のための社のみ残されたのですが、熊野詣が隆盛となり王子社（休憩と遙拝のためのお宮）として整備されました。鳥居の前にある道が昔の熊野街道で、小さな碑も建っています。

一方、安倍晴明神社（写真左）は、この地で安倍晴明が生まれた、といわれます（父親が女狐と契て産んだ子といった話も）。もともと、晴明出生の伝承は各地にあり定かではありません。それでも不思議な力をもったとされる晴明にあやかって、江戸期には参拝の人が絶えなかったそうです。

そして、近年の晴明人気。明治以降、衰微し阿倍王子神社の末社になった安倍晴明神社ですが、いま再び訪れる人が増えました。どんな形であれ、大阪の街や歴史に関心を持つ人が増えるのはうれしいものです。



安倍晴明神社の人气が再び高まっている



阿倍王子神社前を走るのが昔の熊野街道

※名所図会（ずえ）とは名所の来歴などを絵も交え紹介したもの。
※「うえまちweb」(https://uemachiweb.com/)連載の「『上町台地』名所図会」より、みなさまからの反響が大きかったものを、本号外でも掲載いたします。

中原文雄／写真

1948年生まれ。建築工房日想舎 主宰。NPO法人まち・すまいづくり会員。

松本正行／文

1965年生まれ。ライター・編集者。NPO法人まち・すまいづくり会員。



2024年5・6月号

号外
2024
6

発行：NPO 法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX：06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
✉uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

「上町台地」名所図会

第20回

住吉高灯籠
（住之江区）

南海電車・住吉大社駅の西には大阪最初の公園である住吉公園が広がります。その公園の真ん中を貫く道を抜けたすぐ先に、住吉高灯籠（写真右）があります。いまの高灯籠は昭和に入ってからのもので、日本最古の灯台とされ、そもそものは鎌倉時代に漁民たちが航海の安全のために建てた常夜灯が始まりでした。江戸期にはすでに現在の形になっており、「撰津名所図会」などで確認することができま（写真左は明治初年ごろの『写真浪花百景』住吉高とうろう）。

このあたりは住吉の浜と呼ばれた大坂の中でも「名所中の名所」でした。そのため「名所図会」などに使われた絵には多くの人が描かれています。まず、そこは古来より白砂青松が美しい海岸で有名でした。旧暦の3月には巨大な干潟ができ、潮干狩りの人出でにぎわいました。景色も抜群によく高灯籠の上からは六甲山や淡路島などが見渡せたとされています。

住吉という地名に「吉」という字が入るのも、このように風光明媚な土地だからでしょう。ただし、古代、この字は「え」と発音していました。つまり住吉と書いて「すみのえ」「すみよし」と発音されるようになるのは平安時代からだといえます（日本書紀では墨江、のち住吉に）。須美乃叙と書かれたこともありました。その後、「すみのえ」が「住之江」となり、双方が残って現在の区名になったのです。

高灯籠は、より古代の名残のある地（＝住之江区）に建ちます。



住吉の浜は「名所中の名所」だった（大阪市デジタルライブラリーより）



住吉高灯籠は日本最古の灯台

※名所図会（ずえ）とは名所の来歴などを絵も交え紹介したもの。
※「うえまちweb」(https://uemachiweb.com/)連載の「『上町台地』名所図会」より、みなさまからの反響が大きかったものを、本号外でも掲載いたします。

中原文雄／写真

1948年生まれ。建築工房日想舎 主宰。NPO法人まち・すまいづくり会員。

松本正行／文

1965年生まれ。ライター・編集者。NPO法人まち・すまいづくり会員。

らくごハローワーク

眼科医

相羽秋夫の

第29 職 『犬の目』を人体移植の初実験

目を患った男、友人の紹介で名医と言われる眼科医に診察を仰ぐ。医者は男の目をくり抜き、消毒した後に陰干しにする。それを近所の犬が食べてしまふ。仕方ないの、その犬の目を反対にくり抜き、男に入れる。男はそれとは知らず、満足して帰宅する。数日後、再診に訪れた男。暗い所でも良く見える。寝つきが良くなった。だが音がするとすぐ眼が覚める、と礼を述べた後、「一つだけ困ったことがあります。小便する時、片足が上げとうなります」

◇ 脊椎動物（魚類・両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類）は、一對の目を持っている。無脊椎動物でも、1つ又は2つの目を持っているものがある。

人間の目は、眼球・視神経・付属器（瞼・睫毛・網膜・涙器・眼筋）からなる。このどこかが悪くなると、われわれは眼科を訪れる。



1番ポピュラーなのが、近視・遠視・乱視だ。これは年令と共に発症する場合が多い。古来より男性は「蘭・目・摩羅」の順に老化していくことを嘆いた。目の病いは他にも、緑内障や白内障、視力が低下する夜盲症、色別異常の色盲、やぶにらみとも称される斜視など、多くの異常がある。これらのうちには、手当てをしないと失明に至るものが多く、眼科の存在は大きい。

「目は口ほどに物を言う」と言われるように、目は一瞬にして、人間の心を写し出し、てしまふ。目から鱗（うろこ）が落ちる「目から鼻に抜ける」「目から火が出る」「目くじらを立てる」「目には目」「目の上の瘤（こぶ）」「目の正月」「目を皿」など、目にかかわる諺はたくさんある。

ともあれ、視力の大切さは古くから唱えられ、すでに古代では星屋を使って視力検査をしたと伝えられる。

現代の視力検査の基礎を作ったのは、眼科医の梅嶺之丞で、1875（明治7）年に東京女子師範学校（現・お茶の水女子大）で、生徒の視力調査をしたのがはじまりとされている。10月10日は、目の愛護デー。だが、5月1日も「目デー」と言って目の記念日だ。

らくごハローワーク

講師

相羽秋夫の

第30 職 唐辛子燃して邪魔立て『くっしゃみ講釈』

講釈師に恋人との仲を邪魔立てされた男が復讐を企てる。友人に相談すると、講釈をしている時に、胡椒を火にくべて口演が出来ないようになり、と教えられよう。男は胡椒を買いに行くが、売り切れていたので替りに唐辛子を手に入れる。釈場の最前列に陣取り、火鉢にくべる。計算通り、講釈師はくしゃみを連発し、口演不能となった。ほとんどの客は帰ったが、男と友人だけが残っていた。男を見て講釈師「私になにか故障がおりるか」と問うので、男「胡椒がなかったので唐辛子をくべた」。

◇ 現代では「講談師」と呼ばれるが、江戸初期に、徳川家康の前で軍談（軍記）を講釈付きで読んだのが始まりとされる。そこから、講釈師又は軍談師と呼ばれた。軍談を修羅場読みとも言うが、やがて評定物（お家騒動、武家



写真提供:此花千鳥亭(大阪市内唯一の講談の定席)

物（武術の修行、仇討物（例「忠臣蔵」）、俠客物（博奕打ちが主人公）、白浪物（盗賊）など、演目を広げていく。講釈を専門にする寄席を釈場と呼んだ。演者が高座の前に置く机を釈台と言う。落語では見台、浪曲は演台と呼び分けている。また演ずることを、講談は「読む」、落語は「話す」、浪曲は「語る」と表現する。

落語と同じように、上方講談と東京講談があり、東西で大きな特色を見せる。上方は豊臣秀吉の一生をオムニバス風に描いた「太閤記」と、秀吉死後の2つの陣で豊臣家が滅亡する「難波戦記」が中心になる。ほとんどが旭堂の亭号を名のっている。一人だけ玉田を名のる人がいるが、旭堂門下である。

東京講談は、忠臣蔵が主役になる。刀傷松の廊下から討入りまでの物語「義士正伝」、エピソード集の「義士外伝」、さらに四十七士それぞれを主人公にして「義士銘々伝」の3シリーズで構成されている。一龍斎宝井、神田、田辺、桃川、田中などの各一門がしのぎを削っている。「講釈師見てきたような嘘をつき」の川柳が残るように、あらゆる現場にいたかのように、事件を克明にリポートする。現代のテレビのリポーターと好一對の職業である。

住まいと暮らしの総合無料相談会

6月8日・7月13日（土）

10時～12時

弁護士、司法書士、一級建築士、税理士、宅地建物取引士の当法人会員が専門知識を生かし、住まいと暮らしのご相談に応じます。電話またはHPよりお申し込みください（電話受付は平日10～15時）。

主催：NPO法人まち・すまいづくり

（市立社会福祉センター指定管理者）

電話：06-6707-0252

場所：大阪市立社会福祉センター

（天王寺区東高津町12・10）

後援：天王寺区役所

第45回うえまち寄席

6月15日（土）14時開演

桂佐ん吉、桂ちようばによる、古典を中心とした落語会です。電子チケット販売サイト「TIGET（チケット）」からも予約可能です。

場所：心寺南会所（天王寺区逢坂2・7）入場料：2000円

あべのハルカス

4階ギャラリー

揭示料無料

あべのハルカスタワー館4階の「うえまちウォールギャラリー」では出展作品を募集中です。

10代から年配の方まで、女性に人気のブランドが揃い、人通りの多い4階フロアでプチ個展やイベント告知はいかがですか？ 現在、揭示料無料キャンペーンを実施中（1ヶ月・設置料別途）。詳細は上記までお問い合わせください。

詳しくはうえまち新聞web版をご覧ください。



大人のための

文章教室

ライター・編集者 松本正行

読み手に不親切な

「言葉足らず」の文章

今日は雨が降っているので、予定していた打合せは中止にします。

よくやりがちなミスに「言葉足らず」があります。たとえば、例文にはおかしいところはありますが、まったくの部外者だとか「なぜ雨だと、打合せを中止するのか」など疑問に感じることでしょう。中止する理由が書かれていないため、読み手はそれを確認する必要があります。

今日は雨が降っているため、定点観測ができない。データが取れないので、予定していた打合せは中止にします。

言葉が足りないという意味があいまいになり、文章もわかりにくくなるのです。省略しても、読み手にこちらの意図がきちんと伝わるかどうか……。読み手の気持ちになくて読み返すのはもちろん、得意先宛てなど重要な文章ならば身近な人に読んでもらって、きちんと意図が通じるかどうかを確認するようにしましょう。

他にもこんな文章を書いていませんか。「この商品は定期的に適量をご使用ください」。定期的ってどれくらいの間隔？ 適量ってどのくらいの量を？ 読み手に不親切な文章は、混乱を招くだけです。

上町台地上にある高津高校出身。新聞社・出版社勤務を経て、現在、Webや雑誌等で活躍中。NPO法人「まち・すまいづくり」会員。

第17回 夕陽丘うえまち写真コンテスト受賞作品

住吉大社～一心寺・下寺町～大阪城までの上町台地の風景や
そこで暮らす人々をカメラに収めてください。
緑豊かで、歴史と文化いっぱいの上町台地。
その風景や、そこに暮らす人々の姿を写真という一篇の「詩」にしていただく。
写真というものを通じて、この地域の素晴らしさを再発見できる、そんなコンテストでありたいと願っています。

主 催：夕陽丘うえまち写真コンテスト事務局
応募総数：118名・268作品（一般209作品、学生59作品）
審 査：江口保夫（フォトキョイ）
平田秀瑞（一心寺 執事）
清水ミサコ（ラメカカメラ堂）
田中一泉（日本写真映像専門学校）
高口真吾（夕陽丘うえまち写真コンテスト事務局長）

審査員総評

審査委員長 江口保夫（フォトキョイ） 第17回夕陽丘うえまち写真コンテスト入賞の皆様、おめでとうございます。17回も続く写真コンテスト、当初はピンボケや手ブレ写真などの応募もありましたが、年ごとにレベルも上がって来て今回のような優秀作品が集まりました。

とは言え、17年も続きますと多少疲れ気味のマンネリ化が見られ、審査員の目も肥えて見る眼も厳しくなってきている中、今回は今までにないような作品「ツリーに写るハルカス」「Wow！諸行無常」や、今までよく見るような被写体でも素直に捉えて改めてホッとするような作品「仁王」「タワマンと古の坂」など、またどこにでも見られるような普段の光景を瞬間的に切り撮った「ポストのある街」もあり、変化のある作品が多く、楽しく審査させていただきました。

次回もより素晴らしいコンテストになるよう、皆様のご活躍を楽しみにしております。

審査員 清水ミサコ（ラメカカメラ堂） 応募数が少し減ってしまったようですが、総じてレベルが高く、別の年度にご応募していただければ入選したかもしれない作品も数点ありました。入選枚数に限度があるため仕方ないことです

が、後ろ髪を引かれるような思いがあります。

特に思ったのは、学生の方対象の青春賞の難しさです。心惹かれる作品が多かったのですが、どうしても青春という言葉通りの響きを求めてしまう賞のため、モノクロ的な作品は受賞が後回しになる場合があります。爽やかさが青春ではありません。将来や世界への不安などを写真にして一向に構いません。ただ、その心情を「撮影時のエピソード」欄に簡潔に記載してもらえれば、押しやすくなります。

今回も数々の素敵な作品をご応募いただきありがとうございました。
審査員 田中一泉（日本写真映像専門学校） 今年は例年になく上手な写真の応募が数多くあり、とても嬉しい気持ちで満ち溢れました。審査時は頭を悩ませる事がありました。とても楽しく、他では得難い経験となりました。応募者の皆様に感謝申し上げます。しかし、その反面、作者の視点が反映されている良い作品の数が少なかった印象を受けました。素晴らしい写真の中には良いと上手という2つの要素があると考えています。一見、セレクトの際に見落としてしまいがちなそのような作品との出会いを、また来年楽しみにしております。

最優秀作品賞・特別賞



「ポストのある街（親子ポスト）」

宮野末男

街中にある丸型のポストは珍らしく何枚か撮っていると親子のサイクリング？に出会い四角いポストは子供、丸ポストはお父さんそんな思いで写しました。

江口保夫（フォトキョイ）以下江口 どこにでも見られるような普段の光景を見逃すことなく切り撮り、見落とすことなく選択し、そしてコンテストに応募された作者のセンスに脱帽します。このような写真は難しいジャンルのひとつですが、自転車や人の動きを的確に捉え、赤い新旧のポストをアクセントとして入れられた点など、私が大好きな作品です。嬉しいですね。

清水ミサコ（ラメカカメラ堂）以下清水 この写真が素敵なのは、端然とした郵便局の佇まいと、休日の親子の日常が偶然重なり合ったところにあるように思います。未来しか見ていないような少年と、背後から息子を気遣う父親の息吹が感じられます。新旧の郵便ポストが良い仕事をしていますね。

田中一泉（日本写真映像専門学校）以下田中 現代での写真は美術表現の1つとして絵画や彫刻に並ぶ技法となっており、写真の長所に記録性があります。この作品は日頃では見落としてしまいがちな瞬間を記録することができていると共に画面内の色や配置がとても効果的な素晴らしい作品です。

七坂賞



「タワマンと古(いにしえ)の坂」

長沖渉

天に伸びるタワマンションと対称的な石段。令和と昭和が混在する大阪の絵が撮りたかった。

田中 人と建物の縦線または直線と坂のダイナミックな曲線のバランスが素晴らしいです。作者の意図通り、時代の変化も反映されている本作は私たちに時間の移ろいと人が作った建築物が持つ無駄のないデザインの素晴らしさを提示してくれています。

人形フェス賞



「相棒」

市村健次郎

人形は常に観客側を向いて演技しているのですが、人形がこちらに向いた時にシャッターを切りました。

清水 エピソードを拝見すると、たまたま人形がこちらを向いた時に撮影されたということです。そのたまたまの瞬間、人形が格好いいポーズなどを決めていたら平凡な写真になっていたかもしれません。このちょっとしたびれで情けなさがにじみ出るようなポーズが最高です。

青春賞



「萌芽」

川上詩織

写真を撮ろうと歩いていると、切り株を突き破ったような芽を見つけ、すごいと思い撮りました。

江口 どこにでもありそうな切株。その切株の中の萌芽を見落とさずに、撮影された作者の感性は素晴らしい。このような感性を持ち続け新しい写真を撮り続けてください。

「到着」

竹田直太

初めて来る場所に胸が弾む様子が不安そうな様子を表しました。

清水 13歳でご応募いただき本当にありがとうございます。見慣れた大阪環状線の列車が、「世界の車窓から」に登場するヨーロッパの列車のように感じられます。彼はこれからどこに向かうのでしょうか？素敵な到着の場であることを願っております。



「俺達！」

加藤奈緒

バンドを組んでいる友達の写真を撮らせてもらったものです。背景も合わせて、4人の表情が、それぞれ違うのがポイントです。

清水 眩しすぎて、直視できません。職業柄、向かって左から二番目の彼はわざと目をつぶっているのか、たまたまなのか、すごく気になります。どっちですか？あと背景がとてもよいです。この場所を選んだことにセンスの良さを感じます。

上町台地パンフ賞



「夏祭りの始まり, はじまり～」

上原弘士

大阪で一番早い夏祭りと言われている愛染祭りで、多宝塔前の広場で繰り広げられた雀踊りの一場面。腰を落として両手を広げた姿をとて力強く感じました。

江口 愛染まつりの中での雀踊りと言う場面だそうで、人物の位置や動き、表情、そしてローアングルから狙った点、力強さを感じます。また多宝塔の位置もばっちりですね。

「あべのハルカス VS 通天閣」

荒井英一

太陽の位置と雲の形 運が良かった。

田中 あべのハルカスと通天閣は大阪の象徴ともいえる存在であり、この距離でこのような建造物があるのは稀なことだと思います。両者の配置がハイライトとシャドウ側に分かれていることも素晴らしい作品です。

「七夕に願いを込めて」

荒谷譲

七夕の願札を背のびしてできるだけ高くに結ぶことで願いがかなうことを期待している様に思えた。

清水 この作品を拝見して、写真を撮った時の頃に「女性ならではの感性を生かした写真」というアドバイスを散々受けたことを思い出しました。年齢も性別も関係ないですよ。この優美で穏やかで華やかでいて儂い素敵な写真を撮影されたことに、心より感謝します。

「浪花恋しぐれ」

岡本隆雄

レトロな街にびったりの浴衣姿のおふたり。人物だけカラーで他はモノクロにしてレタッチしました。

江口 商店街を浴衣姿の若いカップルが歩く後姿……。これだけでも写真になるのを更に人物だけ色を残し、周りをモノクロにするというテクニックで仕上げた作品。何かしら浪花の雰囲気を感じられます。

特別賞

「ツリーに写るハルカス」

小林博

「夕桜よりハルカス高層ビルを望む」

川根一雄

※作品のコメントは応募者の意図を尊重し、原文通り掲載しております。

一心寺賞



におう

「仁王」

廣瀬靖之

一心寺さんでのお参りを済ませ、三千佛堂からの帰り、仁王門を見ていると太陽が仁王門の辺りに沈みそうだったので、再び仁王門の前にもどり、しばらく待って太陽の位置を何度も確認して撮影しました。ほんとに真ん中に沈んできたので驚きました。

江口 一心寺の正門、どなたもここを訪れたら通るところ、その上にある仁王像には驚かされます。仁王像の写真は過去何度も応募されて審査してきましたが、太陽を真ん中に特に力むことなく普通にまどめられています。何か安心して見られますね。